

研究ノート

# これまでの役割取得能力（社会的視点取得能力）研究と、 これからに向けて

## A review and perspective on role-taking (social-perspective) ability

本間 優子\*・石川 隆行\*\*・内山 有美\*\*\*・荒木 紀幸\*\*\*\*  
Yuko Honma, Takayuki Ishikawa, Yumi Uchiyama, and Noriyuki Araki

本論は、日本教育心理学会第59回総会自主シンポジウム「役割取得能力（社会的視点取得能力）と適応の関係を考える（2017年10月9日実施）」において発表した内容を加筆し、再構成したものである。本論では、児童期から青年期にかけての役割取得能力（社会的視点取得能力）と適応の関係に焦点を当て、話題提供者（本間・石川・内山）がこれまで行ってきた研究を整理し、今後の研究に向けて方向性を示した。さらに、荒木によるコメントを収録し、今後の本分野の研究の発展に役立つことを願い、本論を編集した。

**キーワード：**役割取得能力，社会的視点取得能力，適応，振り返り，今後の発展

### 1. はじめに—本論の意図と目的—

本間 優子（新潟青陵大学）

役割取得能力とは、自己の立場からだけではなく、他者の立場に立ち、相手の感情や思考を理解することのできる能力（Selman, 1976）であり、自分の考えや気持ちと同等に他者の立場に立って、その人の考えや気持ちを推し量り、それを受け入れ、調整して対人行動に生かす能力（荒木, 1990）と定義される。役割取得能力は児童・生徒が適応的な生活を送るために必要であり、重要な要因であると考えられる。本間優子・石川隆行・内山有美は、話題提供者として、2017年10月9日、日本教育心理学会第59回総会にて、荒木紀幸先生をコメンテーター、司会に内山伊知郎先生を迎え、「役割取得能力（社会的視点取得能力）と適応の関係を考える」というタイトルにて、自主シンポジウムを開催した。シンポジウムの目的は、児童期から青年期にかけての役割取得能力（社会的視点取得能力）と適応の関係に焦点を当て、これまで3名が行ってきた研究を振り返り、今後の研究に向けて両者の関係について様々な観点から検討を行うことであった。

以下、シンポジウムを終えて、改めて行った3名の話

題提供者の発表内容のまとめと、今後の研究に向けての方向性、荒木によるコメントを示す。特に、荒木によるコメントは、これまでに荒木自身によって論文化はなされていないが、役割取得能力および社会的視点取得能力に関して研究を行うにあたり、その本質に迫る内容も含まれており、本論により“論文”という形で公式に紙面に残すことは、今後の役割取得能力および社会的視点取得能力における研究の発展には非常に有益であると考え、本論をまとめることとした。

### 2. 役割取得能力（社会的視点取得能力）の高まりは対人行動にどう影響するのか

内山 有美（四国大学）

シンポジウムのメインテーマでもあった役割取得能力（社会的視点取得能力）と適応との関係について、内山の話題提供では適応指標としてアサーションを取り上げた。そして、社会的視点取得能力の測定および評価方法の実例から、アサーションとの関連や実践活動までの一連の研究を紹介した。最後に、身近な日常において求められるあらゆる行動には、社会的視点取得能力の高さが不可欠であることにも触れた。

\*新潟青陵大学

\*\*宇都宮大学

\*\*\*四国大学

\*\*\*\*兵庫教育大学名誉教授

社会的視点取得能力の発達段階の測定には大地震を題材とする「中学生版社会的視点取得能力検査」(荒木・松尾, 1992)を用い, 4つの設問への回答(自由記述)から, 著者とその他の評定者の評定によって結果を得た。その過程で評定結果が異なりやすかった3つの事例を紹介した。1つ目は設問ごとに評定される発達段階が異なることにより, 対象者の総合的な発達段階が評定者間で一致しないケースである。2つ目は高い発達段階に達していることが推測されるものの, 最終的な判断や行動を含む内容は発達段階に相当するものではなく, 低次の発達段階を示す内容となっているケースである。3つ目は評定者間で異なる発達段階と評定していても, どちらの評定も妥当だと考えられるケースである。こうしたケースが生じる理由を説明するために, 1つ目は社会的視点取得能力が高次の段階に向かう様を底から水が溜まっていくコップをイメージとして描き, 発達段階の上下境目に位置する水面は発達段階の判別が難しいとした。2つ目は判断や結論を含む対人行動は, 対象者自身の「共有される経験」(題材との共通点)や「対人交渉方略」による作用が働いたためとした。3つ目は高次の発達段階に対象者は足をかけた状態ではあるが, 確実に到達しているわけではなく, 上下段階を跨った状態にあるため発達段階の特定が困難であったためとした。

次に, 社会的視点取得能力の向上プログラムの介入による, アサーションへのポジティブな影響が確認された取り組みを紹介した。社会的視点取得能力は通常, 発達過程の中で様々な葛藤と出会い, 模索や失敗, そして解決と新たな気づきの繰り返しにより向上し定着していくものと考えられるが, 本実践は単発的介入により得られた結果であり, 効果を得た背景に何があるのか注目すべきところであった。取り組みをまとめた研究(安藤・新堂, 2013)では, Selman (2003)の「個人的意味の意識」によるものと結論づけている。これはプログラムで用いた絵本の主人公や主人公の置かれた状況などが, 対象者自身のこれまでの経験や考えなどと結びついたものであり, その結果, プログラムへの積極的な姿勢とともに社会的視点取得能力の向上に繋がる起因となったためと考えた。

最後に, 社会的視点取得能力は本人だけでなく周りの人間も幸せにするものと述べた。十分な社会的視点能力が備わるとは, 日常生活での様々な場面で他者の立場や視点に立った行動が可能になる。例えば, 電車の中の優先席やフリースペース, 障がい者用の駐車スペース, ボランティア活動やごみの分別などがある。私たちの周りには常に他者の存在があり, 互いに共存しながら社会生活を営んでいる。そして, この社会の中で顔も知らない他者のために行動することこそ, 見返りを求めない相手への“思いやり”であり, 思いやりを持って他者と関わることで自らの心も満たされていくものと考えている。

### 3. 大学生における社会的視点取得能力について 石川 隆行(宇都宮大学)

昨年, わが国では考え, 議論する道徳にむけての提言がなされ, 学校現場における道徳教育の充実が必要とされている。道徳教育の充実においては, 教育心理学からのアプローチが不可欠であり, 多くの研究が展開されてきた。その中で, 荒木(1988, 1992)はSelmanの役割取得能力(社会的視点取得能力)に着目して幼児期から青年期までの発達段階を明らかにした。とくに, その際に使用したジレンマ物語は道徳教育の発展に大きく寄与するものとなった。筆者は学校現場で生じる道徳的な問題や学校適応において, 子どもの罪悪感を捉えることが重要と考え, 幼児期から青年期までの罪悪感研究を行ってきた(例えば, 石川, 2010)。しかしながら, 道徳教育に資する知見の提供には, 罪悪感以外にも, さらなる要因の検討が必要である。近年, 小倉・奥山・栗原・門馬・福島(2014)は大学生が起こす不祥事の一因には社会的視点取得能力が不足していることを報告している。そこで, シンポジウムでは大学生を対象として, 荒木・松尾(2017)の簡易版中学・高校生版社会的視点取得検査を用い, 罪悪感, 向社会的行動との関連を検討したデータの紹介を行った。得られた結果については日本発達心理学会第29回大会にて, 発表を行った(石川・本間, 2018)。本論は, 同データについて再分析を行った。

被験者であった大学生について, 発達段階(得点)の分布を確認したところ, 119名中113名(94.96%)が最も高い発達段階である, 段階4以上(段階4.2以上)に位置し, 偏りがあることが示された(Figure 1)。その理由として, 簡易版社会的視点取得能力尺度は多肢選択法による回答であり, 問1~4のうち, それぞれA~Eまで選択肢があり, その中で回答者は自分の考えに最も該当する選択肢を1つずつ選ぶことにより回答する。あ

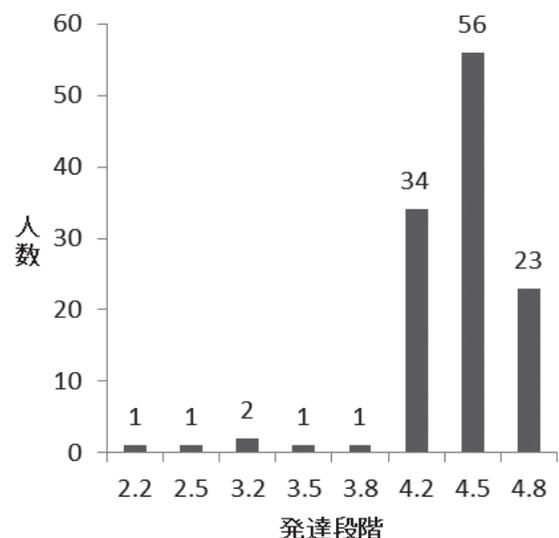


Figure 1 社会的視点取得能力の分布

らかじめ考えが書いてあるため、本研究の被験者であった大学生においては、より社会的に望ましい考えを選択し、回答することにより発達段階（得点）が上昇し、天井効果によって分布が高得点に偏ったと考えられる。得られた分布、および段階4については荒木・松尾（2017）を参考に、4.2-4.5段階と4.8段階を区分することとし、低群（2.2-3.8段階）、中群（4.2-4.5段階）、高群（4.8段階）の3群に対し、石川・内山（2002）の罪悪感質問紙（対人および規則場面）、向社会的行動尺度（菊池、

1988）について Kruskal-Wallis 検定を実施したところ、罪悪感得点（対人、規則場面の両方）および、向社会的行動得点について各群間に有意差は認められなかった（対人場面の罪悪感  $\chi^2=0.46$ ；規則場面の罪悪感  $\chi^2=3.12$ ；向社会的行動； $\chi^2=4.45$ すべて  $df=2, n.s.$ ）（Table 1）。今後も簡易版中学・高校生版社会的視点取得検査の妥当性を検討することが必要であり、妥当性を確立し、道徳教育に役立つ知見を得るための研究を行っていくことが望まれる。

Table 1 社会的視点取得能力と罪悪感および向社会的行動

	低群	中群	高群
	中央値（四分位偏差）	中央値（四分位偏差）	中央値（四分位偏差）
対人場面の罪悪感	33.50 (7.00)	35.00 (3.00)	36.00 (4.00)
規則場面の罪悪感	16.00 (1.90)	17.00 (2.00)	18.00 (3.00)
向社会的行動	59.00 (6.00)	67.00 (9.40)	66.00 (7.00)

#### 4. 児童期における役割取得能力と学校適応

##### 本間 優子（新潟青陵大学）

学校への適応は、児童期から青年期を通して、児童・生徒が心理社会的（psychosocial）に適応していることを示す重要な指標の1つである（Pears, Kim, Capaldi, David, & Fisher, 2012）。学校現場において、子どもの学校適応に関する問題は長年取り上げられ続けており、学校適応を促進することは教育上の大きな課題となっている。

学校適応を促進する要因の一つとして、役割取得能力を挙げることができる。シンポジウムでは、児童期における役割取得能力と学校適応の関係について、行動面での適応（教師評定によるクラス内行動）、および感情面での適応（児童評定による学校肯定感）という2つの観点から、本間がこれまで行ってきた一連の研究（本間・内山, 2005；Honma & Uchiyama, 2016；本間・内山, 2017）について話題提供を行った。

一連の研究の中で最も強調したい研究としては、本間・内山（2017）を挙げることができる。本間・内山（2017）では、パス解析により役割取得能力が学校適応に影響を及ぼす、そのプロセスをモデル化し、検討を行った。得られた結果からは、対人場面の役割取得能力からクラス内での向社会的行動を介し、学校肯定感に影響が及ぼされることが明らかとなった。研究では質問紙調査により、児童のクラス内での向社会的行動を、「他の子どもを励ますことがある」、「他の子どもを助けることがある」、「他の子どもに親切である」、「他の子どもに友好的である」の4項目で測定したが、得られた結果からは、道徳授業を利用し、対人場面の役割取得能力を高めることを

意図した授業を行うことで、子どもたちの教室内での向社会的行動が増加することにより、いじめ等の不適応行動は減少し、その結果、学校肯定感が高まることが予想される。

2018年度から小学校では道徳の教科化が開始されたが、役割取得能力課題は物語を読み、児童はそれに回答するという形式である。児童はクラス内で自身の考えを発表することで、自他の考えの違いを知ることができる。授業展開としては、クラス内で意見交換や話し合いを行うことが中心となるので、役割取得能力課題は道徳授業で違和感なく利用することができる。より多くの小学校で教材として利用されることが望まれる。

現在、筆者はこれまで行ってきた一連の基礎研究を実践に活かすため、小学校において道徳授業を利用した役割取得能力促進トレーニングを行うことによる、役割取得能力の発達段階の促進および、クラス内行動に関する検討を行っている（本間・宮城, 2017）。また、発達障がい児向けにタブレット端末を利用した役割取得能力トレーニング用のデジタル絵本を開発し（宮城・本間, 2017）、小学校の特別支援学級におけるトレーニング効果の検討（本間・宮城, 2018）、および、通級指導教室におけるトレーニング効果の検討（Honma & Miyagi, 2018）など、役割取得能力の促進と行動面へのポジティブな効果について、実践研究をメインに行っている。役割取得能力を促進することは、子どもたちの適応を改善することにつながる。今後も子どもたちとそれに関わる大人たちに役立つ研究を精力的に行っていきたい。

## 5. 話題提供に対するコメント

荒木 紀幸（兵庫教育大学名誉教授）

### （1）検査について

役割取得能力検査（木のぼり課題）は幼児と児童を対象としているが、中学生版社会的視点取得能力検査（アルメニア課題）は中学生・高校生を対象とし、木のぼり課題では測定できないより高次の役割取得（社会・国家、社会制度などに対する）を測定できる検査である。両者を区別するために、アルメニア課題の「役割取得能力検査」の名称を、「社会的視点取得能力検査」とした。ここではより高次の役割取得を扱うことになるので、社会認識の発達を考慮して Selman (1976) が用いたように、社会的視点取得能力とした。また、木のぼり課題は面接による回答の聞き取りであり、アルメニア課題は本人による回答の記述というように、両検査は基本的には個別検査である。このため、教示のあり方、回答の収集、発達段階の評定や同定で測定誤差が生じやすいという問題が常に存在する。研究者により測定結果が大きくくい違わないように、測定に伴う誤差を無くしていかなければならない。そのためには、検査方法や判定方法を共通理解しながら厳密に検査を行い、検査結果を広く公表し、意見交換しながら、測定の精度を高めていく必要がある。

なお、簡易版（2017）の中学・高校生版「社会的視点取得検査（アルメニア課題）」では検査における測定誤差を少なくするための工夫が行われている。4つの質問それぞれに5選択肢の中から自分の考えに最も近い回答を選択させ、4題の回答パターン（最も高い発達段階の回答数）に基づき機械的に発達段階の同定が行われる。例えば、段階4の考え方が1個あれば、(4-)、2個であれば、(4)、3個以上であれば、(4+)と表記する。各発達段階には、便宜的にマイナス(0.2)、中間(0.5)、プラス(0.8)が付与され、この結果、(4-)は4.2段階、(4)は4.5段階、(4+)は、4.8段階と評定される。この4.8段階にはさらに高い発達段階5と評定される人が含まれている可能性がある。

段階5は、社会、国家を超え（社会的公平を強調する段階4を包摂している）、倫理、宗教的な原則から個人の権利や価値を尊重することが含まれる。倫理、宗教という背景があるため、評定者にとって、段階5の理由づけを作成することや回答者の理由づけを段階5と判断することは非常に難しいと考える。なぜなら、社会的視点取得能力の発達は基本的に個人の経験則にもとづくものであるからである。経験則にもとづくという点では、たとえば、宇宙飛行士が宇宙から地球を見て本土に戻ってきた際に、全人類的な世界観（宇宙観）に立った社会的視点取得に基づいてジレンマ物語に段階5の回答をする可能性がある。

限りなく段階5に近い世界観を持つ人を含めて測定したいという意図を実現するために、今回の簡易版中学・

高校生版社会的視点取得能力検査では、(4+)、段階4.8を設定している。

### （2）個人的意味の意識について

中学生版社会的視点取得能力検査（アルメニア課題）は大地震を題材にした検査課題である。ただし、Selman (2003) の述べる「個人的意味の意識」の観点から考えると、「東日本大震災」や「神戸淡路大震災」、「熊本地震」等の被害者にとっては、検査を受ける時期によっては、地震を扱ったアルメニア課題による侵襲性の高さは計り知れず、個人的意味の意識を含む社会的視点調整能力の発達段階を測定することは到底できないと考える。例えば、7年前の東北大震災で津波の被害を受け、今も仮設住宅住まいの高齢者Aさんから、この2018年7月、西日本各地を襲った未曾有の豪雨がもたらした災害、洪水について、その映像を直視できないと心の痛み、フラッシュバックを訴える電話を頂いたことがある。このように回答者の経験則による影響は極めて大きく、調査時期や調査対象者によっては中学・高校生版社会的視点取得能力検査（アルメニア課題）自体、実施することが適切でない場合も想定される。そのような事態を回避する意味で、それとは違った新しい課題を扱った「社会的視点取得検査」を将来開発するのも良いのではないか。

### （3）道徳性との関連について

社会的視点取得能力が高いことは、多様な他者の視点を想定して思考や想像を深める上で必要な能力である。しかしながら、道徳性は認知能力と役割取得能力（社会的視点取得能力）が相互作用する中で段階的に発達していくと仮定するコールバーグ理論に立つと、人間や社会、福祉への関心が乏しいまま、個人の社会的視点取得能力が発達しても、道徳性の発達にはつながらないといえる。例えば、道徳性は低いけれども、認知能力と社会的視点取得能力が高い人の場合には、他者の感情や思考を役割取得して自分の利益や都合に合わせた行動をとることが可能なので、心を痛めることなく嘘をつき、人をだまし、詐欺を働いても悪いことだと感じる事が少なく、平気で人を傷つける行動をとることができる。一方、いつまでも万引きや盗みの非行を繰り返す人の中には、社会的視点取得能力が育っていないために、被害にあった人の苦しみや悲しみ、理不尽、怒りに思いを巡らすこと、つまり役割取得できないことに原因があるのかもしれない。このような場合には、役割取得能力を育てる適切な教育や処遇を用意することによって非行行動の改善が望まれる。

まとめると、社会的視点取得能力を育てたから、それが道徳性の発達につながるといえないのである。またいくら知的に優れても、役割取得能力が育っていない段階では、道徳性は発達しない、つまり低い段階に留まった

ままである。社会的視点取得能力は道德性の発達に先行して発達しているが、道德性の発達にとって認知能力が高いだけでは十分とは言えない。社会的視点取得能力と道德性のバランスこそが重要であって、そのことを再確認する必要がある。

### 引用文献

荒木紀幸 (1988). 道德教育はこうすればおもしろい——コー  
ルバーグ理論とその実践—— 北大路書房  
荒木紀幸 (1990). ジレンマ資料による道德授業改革——コー  
ルバーグ理論からの提案—— 明治図書  
荒木紀幸 (1992). 役割取得理論——セルマン—— 日本道  
徳性心理学研究会 (編) 道德性心理学——道德教育のため  
の心理学—— (pp.173-190) 北大路書房  
荒木紀幸・松尾廣文 (1992). 中学生版社会的視点取得検査  
の開発 兵庫教育大学研究紀要第1分冊 学校教育幼児教  
育障害児教育第12巻, 兵庫教育大学, 63-86.  
荒木紀幸・松尾廣文 (2017). 簡易版中学・高校生版 社会  
的視点取得検査 トーヨーフィジカル  
安藤有美・新堂研一 (2013). 非行少年における視点取得能  
力向上プログラムの介入効果—視点取得能力と自己表現ス  
タイルの選好との関連— 教育心理学研究, 61, 181-192.  
宮城正作・本間優子 (2017). 発達障害児の役割取得能力ト  
レーニングのためのデジタル絵本の開発 日本教育工学会  
第33回大会講演論文集, 401-402.  
本間優子・宮城正作 (2017). 児童期における道德授業を利用  
した役割取得能力向上トレーニングの学校適応への効果  
日本心理学会第81回大会論文集, 988.  
本間優子・宮城正作 (2018). デジタル絵本を用いた特別支  
援学級の児童への役割取得能力トレーニング 日本発達心  
理学会第29回大会論文集, 270.  
Honma, Y., & Miyagi, M. (2018). An evaluation of  
role-taking ability training through a digital picture  
book in children with developmental disabilities.  
The 29th International Congress of Applied  
Psychology (Montreal, Canada), June, 2018.

本間優子・内山伊知郎 (2005). 児童期における規則場面の  
役割取得能力とクラス内行動の関係 行動科学, 44, 1-6.  
Honma, Y., & Uchiyama, I. (2016). The relationships  
between role-taking ability and school liking or  
avoidance: Rule and moral situations. *Comprehensive  
Psychology*, 5, 1-11.  
本間優子・内山伊知郎 (2017). 児童期における役割取得能  
力が学校適応に影響を及ぼすプロセス 心理学研究, 88,  
184-190.  
石川隆行 (2010). 罪悪感の発達 心理学評論, 53, 77-88.  
石川隆行・本間優子 (2018). 大学生における社会的視点取  
得能力について—簡易版中学・高校生社会的視点取得検査  
を用いて— 日本発達心理学会第29回大会論文集, 457.  
石川隆行・内山伊知郎 (2002). 青年期の罪悪感と共感性お  
よび役割取得能力の関連 発達心理学研究, 13, 12-19.  
菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する——向社会的行動の  
心理とスキル—— 川島書店  
小倉泰憲・奥山千尋・栗原利文・門馬甲兒・福島真司 (2014).  
大学生の規範意識と社会性の発達——山形大学学生不祥事  
防止検討プロジェクトの取り組みから—— 山形大学出版  
会  
Selman, R. L. (1976). Social cognitive understanding.  
In Lickona, T. (Ed.), *Moral development and  
behavior*. New York: Holt. pp.299-316.  
Selman, R. L. (2003). *The promotion of social  
awareness: Powerful lessons from the partnership of  
developmental theory and classroom practice*. New  
York: Russell Sage Foundation.  
Pears, K. C., Kim, H. K., Capaldi, D. K., David, C. R.,  
& Fisher, P. A. (2012). Father-child transmission of  
school adjustment: a prospective intergenerational  
study. *Developmental Psychology*, 49, 792-803.

### 謝辞

本研究は科研費16K17457（研究代表者：本間優子）の助  
成を受けた。